

人間ドキュメント

# トルコの13ヵ月

— 現地に設計のハートをつたえて —

宇部興産土木部建築課  
トルコ・ラクダム部応援勤務

中尾秀明さん



(1974 帰国時のインタビュー記事より)

あらっぼく掘削した大きな穴の周りに、大勢の人々が集まっている。立派な口髭をたくわえた労働者たち。ヘルメットに背広のお偉方 何となく神妙な群集をかきわけて羊が引き出されて来た。生贄の動物が穴の縁に据えられると、黒いシャツの男がサツと白刃をひらめかせた。鮮やかな血がほとばしる。黄色い土のくぼみにみるみる赤い液体がたまってゆき、別の男がスコップでそれを穴の中へ注ぎ込んだ。これが起工式か。カタズをのんでいた中尾さんは、ため息をついた。やっぱりここはトルコだ。思いがけない所に来てしまったものだな。



これが神聖な起工式 中尾さん撮影



迫力ある風姿のソイダン氏と彼の助手

思いもかけなかった出張

彼は英語の達人だが「一級建築士の土建屋」さんだから、さしあたって海外へ行く機会があるとは思ってもいなかった。実際今迄は、会社の病院や社宅を設計することが主な仕事だった。その彼がトルコへ、しかも前後2回も出かけることになったのは、宇部興産がトルコ共和国ベトキム石油化学公社にナイロン原料のカプロラクタム・プラントを輸出することになったからである。

これは、プラント機器類の製作・据付から運転指導までを引受けるビッグ・プロジェクトで、社内には「トルコ・ラクタムプラント部」という組織が新設された。トルコとの契約の中には、工場建築の設計という

一項目がある。機器の据付に先立って、基礎や建家の設計を指導監督するという義務である。基本図面は日本で書き、その実施計画はトルコ側がやることになっているが、向うの書く施工図面が正しいかどうかを現場でチェックしなければならない。そこで中尾さんを含む3人の建築技師が、派遣されることになったのである。昭和47年9月、彼は初めての“海外現場”に向けて出発した。

### けんか相手ソイダン氏

トルコの現場生活は、予想以上に快適なものだったらしい。トルコといえば風呂くらいしか知られていないから奥さんは心配したが、仕事は全部英語で済むし、気候は瀬戸内海によく似ているという話の通りだったので、安心セヨと彼は手紙を書き送った。現場は、イスタンブールから東へ85km程のヤリムジャ村にある。カプロラクタム以外にも、ベトキムの色々なプラントの建設が進められていて、技術提携先の各国の技術者が中尾さんのような指導員としてやって来ていた。指導員宿舎はホテルのような4階建てで、個室は風呂ならぬシャワー付である。宇部興産のスタッフは、現場事務所の中に一室をかまえていた。毎朝、中尾さんが出勤すると、ベトキムのエンジニアである大男が入って来る。彼はソイダン氏といい、トルコ側の建築責任者だ。施工図面を拡げて中尾さんの承認を取るのが仕事なのである。中尾さんからみると、トルコ側の仕事はどうも納得出来ない点が多い。プラント建築の設計は機器の配

置、特に配管の取合せがカナメになるのだが、その実情がつかめていないから必ず何か問題点がある。そうかと思うと、日本なら職人まかせの判り切ったデティール迄、細密に書いてくる。中尾さんとソイダン氏はカンカンガタガクやり合うが、結局はトルコ側が引下がる。もっとも、必ずひとこと文句を言いながら。

### ミスタ・ナキオを返せ

しかし中尾さんは、ペトキムから非常な信用を得た。若くて気軽だし語学が達者、仕事にはきびしいが誠実だ。事務所と現場にいる時間は7..3くらいの割合で、彼がUBEのヘルメットをかぶって現場へ出て行くと親方のチャーリーや労働者達まで必ず「ミスタ・ナキオ！」とか「カオ！」と呼びかけてくる。昭和48年の3月一たん帰国した彼は、そんなわけで、7月には又ペトキム社からのたつての希望で呼び戻されてしまった。この時は宇部興産とペトキムとの間に中尾を半年で必ず返すことという議定書が交わされたが、これは前代未聞の話だという。だが、すべてが順調ということは無いものだ。昭和47年暮のこと、ペトキム側は鉄骨資材の入手難を理由に、設計の大幅変更を申し出てきた。日本側が設計した鉄骨構造を、一部鉄筋コンクリート構造にしたいというのである。設計家としてこの主張はよく理解できたから、中尾さんは板バサミになった。宇部興産のエンジニアリングは、すでにこの時鉄骨を前提にした計画が終わっていた。ダメだと言ってくる日本とテレック

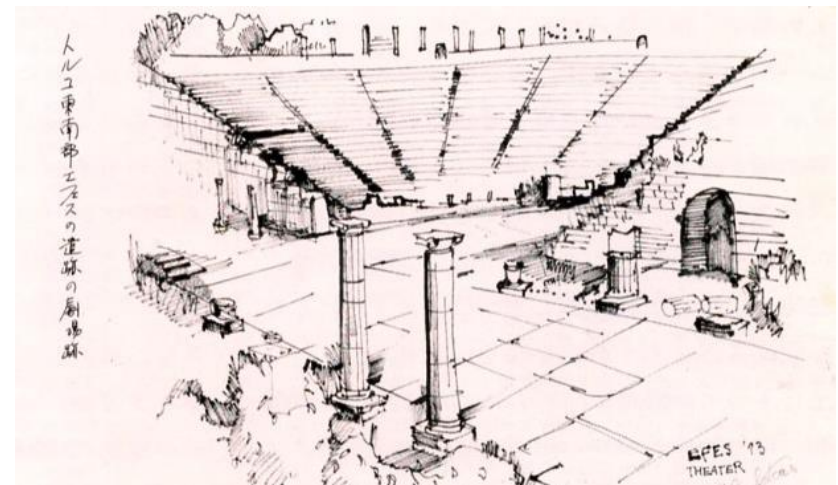
スによるやりとりが続き、結局半年の遅れを出して設計変更が行われた。もともと細身の中尾さんは、この時3キロもやせてしまった。

トルコは古く、そして若い

だが今となってみれば、楽しいことの方が多かったと彼は思う。例のソイダン氏とは在任中1000枚以上の図面をもとにやり合ったが、結局友達になった。家に招待されてみると、中尾さん同様幼い一人娘に目がない、気のいいオヤジなのである。女性は例外なく きれいだったし……。そういえば、プロジェクトのディレクターはイルドリム夫人という若い美女。これにはびっくりした。トルコという国は古いようにみえて、若い社会を持っているのだと、日本の事を考えてしまう。ヤワシ（ゆっくり）とヤルン（明日）がモットー？ の国だし回教国だから、労働者たちはすぐ地面にセメント袋を敷いてお祈りを始める。能率はひどく悪いが、日本みたいに急がない国があってもいいじゃないか。考え方の幅がひろくなったような気がします、と中尾さんは言う。「設計のメドがついたので、もうトルコで仕事をするのではないと思います。しかし僕にとってトルコは他人の国ではなくなりました。ソイダン氏も別れの時、「オレ達の友情は永遠に変わらない。今度はワイフをつれてこい、と言って抱きしめてくれましてね」 トルコには通算13ヶ月いたことになる。帰国は今年2月2日。愛妻にはトルコ石。一人娘の友香ちゃんには、ウサギの毛皮の帽子をおみやげにして。



労働者たちは争って、中尾さんといっしょの写真に収まろうとした……



トルコ東南部エフェソの遺跡の劇場跡